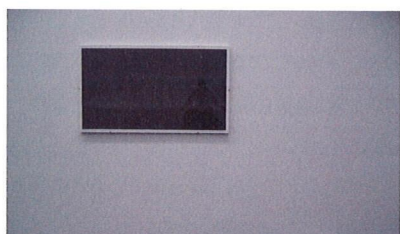
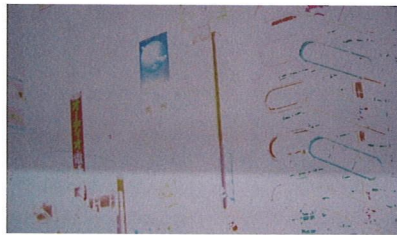
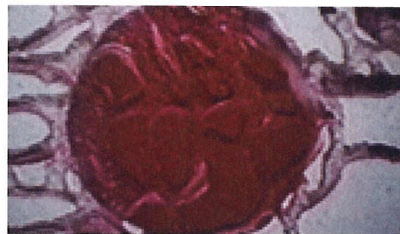
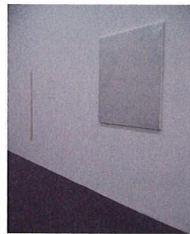


# 学生交流事業 Art Crossing Hiroshima Project 2005 Winter — ギフト・オブ・ヒロシマ

会期：2005（平成17）年12月14日⇒2006年1月29日  
会場：ドイツ・ブランシュバイク美術大学 アートスペース  
報告：鍛澤達夫



Gift of Hiroshima  
Art Crossing Hiroshima Project  
Winter 2005  
14. Dezember 2005 bis 29. Januar 2006



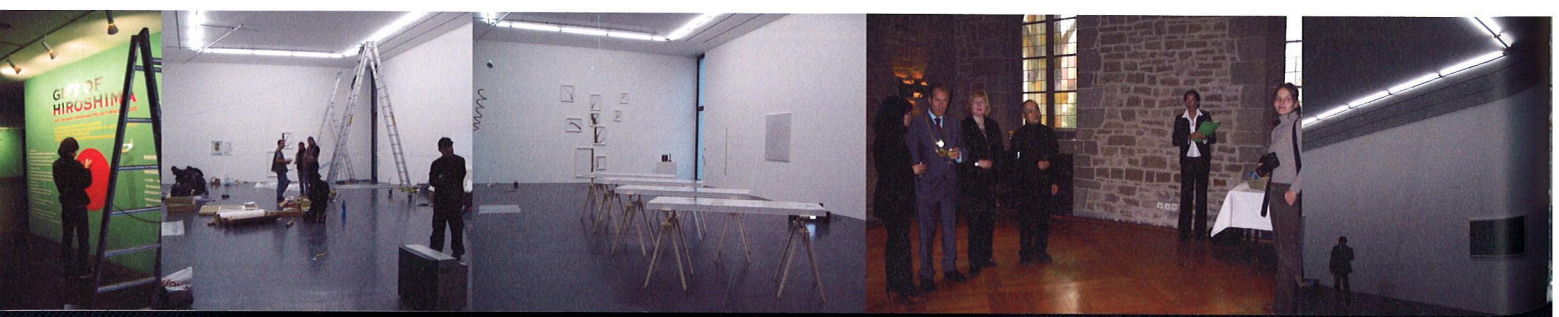
2001年に開催された「Art Crossing Hiroshima project 2001 Spring」は、アートが広島市の街にいかに関わり、活性化の起爆剤となるかという発想のもと、企画・運営された。都市とアートの関わりは長い歴史を持っており、都市とアートの関係は切っても切れないものである。複雑な構造が入り組む現代都市において、この時代に活動を続けるアーティストたちは、一体どのように自分たちを取り囲む環境を受けとめ、それをどのように作品に反映しているのか。この一貫したテーマにおいて「Art Crossing」プロジェクトは4年を経て、「日本におけるドイツ年」である2005年を迎えた昨年、その開催地を日本/ドイツへと展開した。

## — ギフト オブ ヒロシマ —

出原均（広島市現代美術館学芸員）

被爆によって廃墟と化した広島市が、戦後、国内外の様々な支援を受けたことは、現在も広島市の街のところどころに見ることができる。たとえば、平和大通りや平和公園の木々がそうであるし、世界平和記念聖堂の建物やパイプオルガンなどの調度がそうである。たとえ今は眼に見えなくなっている、あるいは、もともと物としてではないものであったとしても、広島の人々は、過去に受けた様々な数多くの支援を心に深くとどめている。

これらのギフトがあってはじめて今の広島があることを広島の間人は忘れないし、忘れるべきではない。それゆえ、今、広島からギフトを送ることにとくに意味がある。ギフトの恩恵を受けた広島だから、その意義を十分認識しているはずである。当然、その内容については十分問われなければならない。





あらかじめ言うならば、広島市立大学からドイツのブランシュバイク大学及びバイセンゼー芸術大学に送られる「ギフト」とは、まだ見ぬヒロシマでなければならない。誰もが描くような公約数的ヒロシマではない、広島の地にある意味で深く錘を下ろした、とはいうものの、ただその場の論理に偏狭に縛られるのではない、どこかに突き抜けた、だからこそ、まだ見ぬヒロシマというほかないものなのだ。したがって、それらは、ひとつひとつが独自性をもち、全体において、いや、安易に全体が成立するかどうか分からないほど多様を有していなければならない。

贈与論を持ち出すまでもなく、ギフトは送り出すほうのシステムに大きく関係するのは当然である。こうしたギフトを行うことによって、広島市立大学、あるいは、より広く、広島が変わっていくにちがいない。その変革の可能性を考えるならば、その表現は、やはり、繰り返すが、まだ見ぬヒロシマ、可能性としてのヒロシマになるにちがいない。

### 「ギフト・オブ・ヒロシマ」について

ドイツのブランシュバイク市に属するブランシュバイク美術大学のアートギャラリーに、彼らアーティストは「ギフト」を届けようとしている。彼らの背景とその関係性を照らし合うことで振り返ることのできる、パッケージとしての「ギフト」。個々のリストの中に作り上げられた制作に対する姿勢を再検討する、思いとしての「ギフト」。彼らの作品の経過を手にとって見つめることのできる、一冊のカタログとしての「ギフト」。そして、現在の作品に至る4年間のプロセスそのものとして表現された、作品としての「ギフト」。この「ギフト」を受けとるのは、アートギャラリーに集まるであろう次世代を背負った若い学生や教育の現場に立っている教員達、そして、現代美術に対する認識が日常生活の中に既に定着しているドイツ国内の一般鑑賞者である。国境を越えて送り届けられる「ギフト」に込められたものに対する期待は計り知れない。

かつて「Art Crossing Hiroshima project 2001 Spring」が、現代都市と向き合うといったテーマだけにとどまらず、「国際・文化・平和」を唱える「ヒロシマ」というメッセージ性を包有し、そ

れを伝達したことをふまえれば、この「Art Crossing Hiroshima project 2005 Winter- ギフト オブ ヒロシマ-」が、制作活動を続ける彼らの思考と、その背景にある共通点としての「広島」へと、その想像をかき立てていくと考えられるのではないだろうか。相互の異文化コミュニケーションは、アートを通して、多くの鑑賞者の反響を手に入れ、日々私たちが取り組んでいる様々な問題意識へと結びつく、「認識」に対するヒントへと導いてくれるものと私たちは考えている。

いわば「Art Crossing Hiroshima project 2001 Spring」が都市とアート、そして市民を交差させる装置として選んだものが「場」という「ハード」であったことに対し、「Art Crossing Hiroshima project 2005 Winter- ギフト オブ ヒロシマ-」は、私たちのなかにある「認識」、つまり今度は「ソフト」を基盤とした装置として成り代わり、その展開をみせようとする試みであった。

遠く離れ、国境を隔てた都市である「広島」を、彼らは「ギフト」としてドイツに届けられた。

主催： ブランシュバイク美術大学、広島市立大学  
Art Crossing Hiroshima Project 2005. Winter  
ギフト・オブ・ヒロシマ実行委員会  
共催： ブランシュバイク市、広島市、日独協会  
後援： 広島市現代美術館、ドイツ学術交流会 DAAD  
大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館

参加作家：

前川義春、鍛澤達夫、柳幸典、平野薫、岩崎貴宏、福田恵、  
古堅太郎、棚次理、米倉大五郎、和田礼次郎、塚本峰子、  
友枝望、福増恭子、福永敦、今井みはる

プレゼンテーション：2005年12月12日（月）

ワークショップ：2005年12月14日（水）、15日（木）、16日（金）

